

浄土

六月号



法然上人鑽仰会

昭和十年五月廿一日 第三編 郵便認可
昭和二十四年四月二十八日 通地省 (特別送達郵便) 第三五二号
昭和四十四年五月二十五日 印刷 昭和四十三年六月一號 発行

第三十四卷 第六号



人のたくましさを育てる

梅雨の季節である。満員電車で揺られていると、むんむんして、うっとうしく感ずるが、ときおり、雨のしとしとふる道を散策してみると、なんともいえぬ風情を味う。目にしみるみずみずしい若葉が、雨にうたれながらいきいきとしている。根には、充分の水分があたえられるからであろう。

おもえば、大自然の草木は、梅雨のなかに生長していく。

おなじように、人間のたましいも、日常の生活のなかに、とくに逆境のなかに育てられ、みがかれていくものである。恵まれた、なんの不安もない人生をあゆんでいるときより、つまづきながら、不安や、いらだたしさを覚えている、そのときにこそ、仏の本願によって、人のたましいは、はぐくまれ生長するのである。

つゆは、まことのたましいを育てる季節である。

—目 次—

表紙「箱根風景」松濤達文画

仏教の母性観	横山善隆… (2)
二祖三代の歩み ③	三枝樹隆善… (6)
新刊紹介 「異国旅情」	(9)
インド・ネパールの旅 ②	戸松啓真… (10)
法然上人讃仰運動を強めよう	(14)
アメリカに於ける開教使を終えて ④	伊藤正穂… (16)
四苦八苦⑩ 琴の糸	渋谷賢応… (20)
和訳三部経 浄土の人々の諸々相	村瀬秀雄… (22)
ある父と子の悲しい別離	長谷川宣丈… (26)
お歌をいただく	(28)
ある質問	(29)
児童劇 ピーターとおおかみ ③	(30)
編集後記	(32)

露の身はここかしこにてきえぬとも
心はおなしはなのうてなそ

法
然
上
人
御
歌



仏教の母性観

横山善隆



||
—
||

釈尊は、その降誕のち、わずか数日にして母マヤー夫人を失われた。仏教の母性観の出発点は、ここにあるとおもう。幼くして生みの母を失うということは、人生最大の悲しみであり、痛ましいことである。幼少のときを通して、青年期に入られたシツタル太子に、憂鬱な気分がつきまとったということは、なんとなく生みの母の面影をもとめて、生みの母親の母性愛をもとめられたのではないであろうか。人生の悲痛感、いかなる精神的天才にあっても、きわめて、身に近いところから感ぜられるものであらうとおもう。

釈尊が、三十三天すなわち物忉利天上にのぼって、母マヤー夫人のために、追善のため九十日の間、説法されたということが、心地観経報恩品などにのべられているが、それは、釈尊が、母親を慕われた、み心の痛切さを物語るものとおもう。

その痛切な追慕において、釈尊の心には、母性の美しい面が、殊にふかく感ぜられたことであらう。報恩品に父母の恩を説くといひながら、主として、母の恩ばかりが、非常に具体的に説かれてあるのも、意味ふかいことである。母の十徳というようなことは、釈尊が追慕の情のなかに感ぜられたことが根本となって、報恩品における叙述となったものに相違

ない。釈尊には、自分が世に出られたがために、母は世を去られたという悲感のふかいものがあつたのであろう。

しかし、母性を単に美しく見ているばかりではない。目連の母が餓鬼道の苦をうけていることを説かれているのは、どんな意味になるのであろうか。母親が邪見であつたのであろうか。

そうではない。それは目連の自覚の境地であつて、われゆえに母を餓鬼道に陥らしめた、という悲痛な自覚であらう。

ゆえに、神通第一の目連でもこれをどうすることもできずに、釈尊におしえを請ひ、衆僧九十日間の安居の力が、わが身にうけた七世の父母を祭るということになるのである。

孟蘭盆経のふかい意味がここにある。

目連と相ならぶ舍利弗も、母に対する切実な関係が、私どもの心を感じしめるものがある。舍利弗は、老年に達して故郷に帰り、そこにいまだ生きながらえている母の心を、仏教によつて開き、そして、自分が母から生れた部屋をみせてもらつて、非常に感きわまつて其処において死ぬのである。

二 二

仏典には、多く母ということが説かれているが、華嚴経に

おける母という問題は、実に広大なことになっている。

華嚴経の入法界品には、善財童子の求道のこと説かれているが、善財童子を導く善知識は五十三人もあつて、それが、凡夫の位から、仏陀の位にまでのぼつてゆく、いわゆる五十二位を代表するものといわれている。その五十一番目は、等覺の位といつて、仏陀の妙覺とほとんど等しいさとり位の位なのであるが、その位を代表するのが、マヤー夫人である。

元來、善財童子というのは、成道の釈尊において出現して来る深い求道魂をあらわすものと見るべきであるから、善財童子の善知識は、すなわち釈尊の善知識であるということになる。その善知識の最高の位、妙覺のつぎに供する等覺の位を代表するのが、マヤー夫人であり、しかも、それは広大な存在であつて、一切のボサツの母となつてゐるから、仏教における母性は、華嚴経において、最高位に示されている。

それも、本來釈尊の心にあつた萌芽が、ここまで發展したものであるといふことができる。

母性のはたらきは、摂受としてあかされている。折伏と摂受とは、相ならべて考えられるのであるが、折伏は、打ちこらす力であり、摂受は、温めてとかす力である。

人間は、打ってこらしたばかりでは、善くなるものではない。温めてとかしてこそ立直ってくるものである。

人間の教化は、折伏をもって終らずして、折伏してのちに、摂受して、はじめて教化が全うせられるのである。

この意味において、母性は、実に大切なものである。仏典は、この点を明かにしている。

しかし、入法界品のマヤー夫人は、広大な存在であって、いわば理念ともいふべきものであり、人間界における血あり肉ある存在ではない。わたしたちは、理念で満足するものではなく、かならず血あり、肉あり、涙ある存在に触れねばならない。

ここに、仏典にみえる、イダイケ八韋提希夫人が、わたしたちの心にふれる存在となるのである。

いうまでもなく、イダイケ夫人は、「観無量寿經」の中心人物である。

|| 三 ||

この物語において、イダイケ夫人は、最初は、母性愛をあらわしてはいない、夫のピンピサー王に対しては、ふかい親しきをもつていても、わが子の阿闍世に対しては、恐怖の

感をもっていたとおもわれる。母親が、子供をおそろしいとおもっている限り、母性愛は現われてこないのである。

そのおそろしいという予感にあたったのである。阿闍世は、実に恐るべき逆悪のことをおこなった。このときには、イダイケ夫人は、まったくの愚痴の一女性となっている。釈尊に対して、愚痴のかぎりをはたしている。そのすがたには、母性の片鱗もあらわれていない。

このイダイケ夫人に母性が目ざめて来るといふことが、観經の説法の大切な点となっている。釈尊は、夫人の母性をよびさまされたのである。仏陀の大慈悲を説くことによって、母性をよびさましたのである。

「汝いま知るやいなや、阿弥陀仏ここを去ること遠からず」という釈尊の一言は、仏陀の摂受の心をのべたのであり、この摂受の心が、イダイケ夫人の母性を呼びさますのである。空中に住立したまう弥陀尊をおがむというのは、やるせない仏陀の慈悲を感じた、イダイケ夫人の心のありさまである。

いまや、愚痴の一女性の上に、摂受の母性があらわれたのである。

涅槃經梵行品には、苦悩する阿闍世があらわれている。父

ビンビサーラ王を獄死せしめたことを痛切に後悔する阿闍世があらわれてくる。心が悔熱するがゆえに、偏体に瘡を生ずというありさまになって苦しむのである。

このとき、イダイケ夫人は沈黙して、唯ひとすじに看病するのである。

阿闍世の過去の逆悪事を責めるでもなく、愚痴をこぼすのでもなく、ただ黙って看病して毎日いろいろの薬を考えてつくって、その偏体の瘡に塗ってやるのである。

そこには、純一な母性の尊いすがたをみることができるといふ。

信仰に徹したイダイケ夫人にはじめて、母性が、あざやかにあらわれたのである。すなわち、信仰によって、母らしいたましいが出現したのである。

観経のはじめにおいては、まったく愚痴の女性であったイダイケ夫人が、このようにかわってきたことは、実に著しいことであり、これは、釈尊に感ぜられてある母性が、イダイケ夫人に感応したのであらう。

そこに、血あり、涙あり、いのちのある母性があらわれたのである。

仏典にあらわれた女性には、勝鬘経における勝鬘夫人のように、賢明な女性もある。勝鬘は、賢明にして、信順、一国の後として、七才以上の女性をことごとく教化するという力をもった、偉大な女性である。

しかし、勝鬘は、まだ母親ではない。母性のいちじるしいすがたを、勝鬘にみることはできない。その釈尊のまえにおいて誓う十大受、三大願のごときは、実に尊いことである。しかし、また、イダイケ夫人のように愚痴の女性が信仰に入って、その母性を鮮やかに発揮するということは、まことにありがたいことである。

無量寿経に、「もろもろの黎庶に施すこと、純孝の子の父母を愛敬するがごとし」としてボサツの徳をたたえているが、この場合菩薩は、子の立場にあって、ボサツの心に衆生を父母の立場にしているのである。母は子供に奉仕しつつ子供を導くものであり、それは、ボサツにおける母性を物語るものである。高きにあつて、衆生を導くというのではなく、低きにあつて衆生に奉仕すること、子が父母を愛敬するがごとくであり、ボサツの究意するところは、生きとし生けるものの純粋な愛と奉仕である。仏教の母性は慈悲にはぐくまれた実践のすがたを示し、お念仏は、母性を育てるものである。



二祖三代の歩み

五 二代の継承者

鎮西の求道僧

宗祖法然上人は、静寂な幽境の地、京都東山大谷（今の知恩院）の吉水の地に草庵を結ばれ、熱烈に念仏信仰を一般民衆の間に唱導されました。宗祖の智徳円満で人格崇高な徳風はたちまち洛中洛外にひろまり、大谷の草庵には、毎日いろいろな人が訪れて、身に迫まる現実の苦しみ悩みを打

ちあけて精神生活の悦びを味ったのであります。宗祖はどのような人びとにでも常に念仏

生活の尊さを力説され、ともに声をあげて念仏を申されました。上は王侯貴人や学徳の高い僧徒から、下は心猛き武夫や町人や田夫野人の一般庶民に至るまで、老若男女をとわず、大谷吉水の草庵には西方浄土をねがう人びとの念仏の聲が高らかに流れ、入門を希望して許された修行僧や学僧が、七、八十人を超えたといわれます。宗祖はここを本拠として比叡山をおりられた年の四十三歳から八十歳の入滅まで四十年近くも、一般民衆の友となり師となつて念仏の教えをひろめられた

のであります。

ところで、建久八年（一一九七年）五月上旬のころ、東山一帯は青葉に包まれて美しく、大谷の草庵の昼下りの庵室には、早くも初夏のすがすがしい風が吹き込み、そこでは六十五歳の宗祖が静かに念仏を申されていました。そのとき突然、そこに一人の旅の僧が訪れて来ました。その僧は、はるばる鎮西（九州）の地から京都へ、仏像を求めにやって来た、聖光房弁長（のちの鎮西上人、このとき三十六歳）という学問盛りの天台宗の学徒でありました。以前、叡山で修学していたころ、法然上人の徳風

の高いことは聞いていたが対面するのはこのときが初めてであった。その僧は心ひそかに「どんなに法然上人の智慧が深いといっても、自分ほどではないだろう」と思っており、さっそく浄土宗の教えの要点を質問してみました。宗祖はにっこり笑って「あなたは天台の学者であるから、まず念仏を三種に分類して説明しましょう」といって、夜の十二時ごろまで休みなく十時間ほどかかってことこまかに称名念仏の深い意味を説明されました。これを聞いていたうちに聖光房弁長は、その高慢な心をすっかり打ちこわされ、「なんと智解深遠の大徳であろうか、またなんとすばらしい修行を積まれたものであろうか」と心から感激され、自分の学問などはとうてい及びもつかないものであることを知って、即座に、宗祖のお弟子となって念仏の行者となられたのであります。

鎮西上人は晩年に、「南無阿弥陀仏と申すことは如何なる人の口にも唱えられることとなり、貴き人の口にも賤しき人の口にも、

智慧ある人の口にも智慧なき人の口にも、徳ある人の口にも、貧窮の人の口にも、幼なき人の口にも年老の人の口にも、幸ある人の口にも、幸なき人の口にも、誠にかかる目出度きと待りて、普く万人を極楽に導き渡す。功德善根のあまねく衆生を利益し度すること、ただこの念仏なり」ということを『念仏名義集』の中で述べておられます。これこそ、宗祖の教えをすなおにうけつがれた鎮西上人のお言葉といえるのであります。

鎮西上人が宗祖に師事されてから、三ヶ月の月日は夢のようにすぎ去りました。かねて注文しておいた仏像はすでに出来上がったが、念仏の求道に燃える上人は宗祖のもとを離れたくはなかった。上人が日一日と帰国を延ばしておられると、宗祖はそのことを知って「早く御本尊を納めに帰えられたがよい。そうして折があれば四国の伊予の国へ念仏を弘めに行つてほしい」と申されました。宗祖のお言葉によって帰国された鎮西上人は、筑前明星寺の入仏供養を無事にすまして、翌建久九年八月には四国に渡って念仏の教えをひ

ろめられました。その翌年二月には再び上京されましたが、それ以来、六年間というものは、師の許で念仏生活に力の限りをつくして精進されたというのであります。

六 三代の継承者

——学解の念仏僧——

宗祖は直弟子聖光房弁長すなわち鎮西上人に、浄土宗の奥義を余すところなく授けられました。そうして宗祖は鎮西上人に向つて、このときおそらく「あなたの故郷へ帰つて、九州一帯に念仏の教えを弘めて下さい」と申されたことでしょう。このような師命をうけられた鎮西上人は、元久元年（一二〇四年）八月、朝夕すでに肌寒さを感じるところ、師に別れを告げて九州地方の開教の途につかれました。こうして九州へ帰えられた鎮西上人はその後、筑後（福岡県）の善導寺を専修念仏の道場と定めて、

ここを本拠として九州の各地に教線を張られたのであります。やがて鎮西上人は安祿二年（一二二八年）の冬、六十七歳のとき、肥後（熊本）の白河往生院で二十人余りの人たちと一緒に、四十八日間の別時念仏を修行され、宗祖法然上人の正しい教えを後世の人びとに伝えるために、『末代念仏授手印』一卷を書かれました。こうして宗祖の教えの信随、すなわち選択本願の念仏を盛んに宣布されたのであります。

それから八年ほど経過して、鎮西上人は七十五歳になられ、この頃になるとなんとなく年をとったことを身にひしひしと感じられていました。そうして嘉禎二年（一二三六年）九月、鎮西上人はたまたま善導寺から五里ほど離れた上妻の天福寺に滞在しておられました。そこへ、良忠と名乗る新進の学僧がわざわざ石見の国（島根県）から訪ねて来ました。この人は鎮西上人が宗祖の教えを正しく宣布せられているということを聞いて、その教えをうけにやってくる

たのでした。このとき良忠は元気いっぱい三十八歳でした。ここで師は良忠に文字通り、教える人と教えられる人とが一体になって、高祖善導大師の『観經疏』をはじめとして、宗祖法然上人の『選択集』など多数の宗典を一つ読みあげて、翌年の八月まで約一ケ年間、休むことなく講説して教えの内容をあますところなく伝承されました。このように良忠に教えを授け終った鎮西上人は、「宗祖法然上人は浄土宗の奥義を私にお伝え下さいました。そこでいま私は、その相承の奥義と私がそれを理解して書き記した『徹選択集』をあなたにさし上げましょう」と申されました。そうして「然阿（良忠）のようなすぐれた人物が出来たので私は若くなったような気がする」といつて喜ばれたと伝えられています。

こうして、良忠上人は浄土の宗脈の第三代の法統を嗣ぎ、師命をうけて遠く、関東を中心に広く各地に教網を張って念仏の教えを弘められました。当時、布教といえは、經典や

宗典を講義することがその主要な仕事でした。したがって布教者は少なくともこれに耐えうる人でなくてはなりません。二代の鎮西上人は良忠上人が正しくその当時、うつわであることを見ぬいておられました。良忠上人はいわゆる仏教学者として最も勝れた方であつたのであり、八十九歳で亡くなられるまでに、五十巻余りの大著述をなしとげておられます。これらはすべて重要な浄土宗典をことごとく註釈して、宗義の大綱を明らかにせられたものであります。このように多くの著作を見ますと、良忠上人がいかにもすぐれた仏教学者であつたかということがよくわかります。

（先月号での「二祖三代の歩み」の中、巻頭の表題、「三、高祖の人間像」の祖の字が校正の誤りにより祖の字となつてしまひ、筆者・読者の方々に大変ご迷惑をおかけいたしました。おわび方々訂正させていただきます。）（編集部）

新刊紹介

浄土門主

総本山知恩院門跡

岸信宏貌下著

異国旅情

とつくにの旅をいくたびかさねつ

八十路の齢かさねてしかな

思ひきや八十路の齢たもちえて

祖師の御廟につかふる身とは

八十歳をお迎えになられた、岸門主貌下

が、その感懐をこめておつくりになられた御

歌である。御門主におかれても、人生八十年

の旅路は、必ずしも、順風満帆の毎日ではな

かったかもしれない。人生の悲しみ、喜び、

そして厳しさを肌に感じとられながら、一日

一日を積み重ねて、八十年をお迎えになられ

たことであろう。

しかし、いま八十年を回顧されて、懐しい

感慨のなかに、人生の尊さと喜びを味わいと

られている御心境は、お念仏に育かれた、

まことに得がたき境地である。

序文のなかに、まさしく臨終にのぞみ給と

き、慈覚大師の「九条の袈裟をかけ、頭北面

西にして、光明遍照、十方世界、念仏衆生、

摂取不捨の文となえて、ねぶるがごとくし

て、息たえたまひぬ。音声とどまりてのち、

なを唇をうごかし給事十余返ばかりなり。面

色ことにあざやかに、形容こめるに似たり。

……春秋八十にみち給。釈尊の入滅におな

じ。……」という、勅伝の法然上人御臨終の

模様を引かれ、「私もまたこんな静かにして

立派な往生の日をいつ迎えることができまし

ょうか。……毎日ば称名の喜びの中に過さ

せて頂くのみであります」と述べられてい

る。尊いことである。

わたしたちは、年令に関係なく、仏教は理

解することはできるが、それが、いのちのな

かに育くまれるのには、体験のほかにはな

い。体験は、年令をつみ重ねて分るものであ

ろう。釈尊や、法然上人のころがわかるに

は、やはり、その年に達して、はじめて味う

ことができるような気がする。そのため

に、長生きをすることが大切である。この意

味で、御門主が八十才をお迎えになられたこ

とは、まことにありがたいことである。

その記念として、出版されたのが、異国旅

情と題する本である。

一、ビルマ遊記

二、ハワイ巡錫

三、天竺行脚

の三部からなっている。かつて御門主が親し

く訪問され、勝縁を結ばれた海外旅行の思い

出を綴られたものであるが、その行間を通し

て、人生航路の指針を示しておられる。

興味ふかく一思いに読ませていただき、あ

と、ほのぼのとした、ぬくるみを感じる本で

ある。

発行所 京都市東山区林下町

総本山知恩院



ジャイン・テンプル（カルカッタ）

インド・ネパールの旅—(2)—

戸松啓真

△カルカッタ▽

カルカッタの飛行場へ着いたのは、二月十日の午後六時半頃であ

った。飛行場もその周囲も暗い上に時間差の変更があったので、もう相当おそい時間のような気がした。インド大菩提会のジナラタナ師等の出迎えをうける。真暗な街道をノーライトのバスで約三十分走って市内へ入った。道の両側には点々と窓のないような粗末な家にランプがともっていた。その暗い夜景はかつての大東亜戦争中の支那の南京附近の感じに似ていた。目抜き通りの宿舎オベロイ・グランド・ホテルは、欧米風で洋室の部屋も立派であり、夕食は正装とのことでネクタイをしめて食堂へ行く。食事をしているのは外国人が多

く、ちょうど楽団の演奏をしていたが、私達が入っていくと「荒城の月」を演奏してくれた。一同少し甘いインドビールで乾杯。でてきた食事は、コンソメ、魚フライ、野菜、フルーツミックス、パン、紅茶のフランス料理なので先ずお腹の方は一安心だった。

翌日の午前中は、自動車でビクトリア記念館、植物園、カリー寺（インド教）、ジャイン寺（ジャイナ教）等を見物。ヒンドゥー教シャクティ派の本山といわれるカリー寺は、おまじりの老若男女の群で雑踏していた。ちょうど正月の浅草の観音さまのような賑ぎあいで、バスを下りると銭乞いの子供や老人と物珍らしげによってきた人びとにとりまかれてしまった。僧らしい人の案内で中へ入ると、日本のオミクジのような紙を結んだ木があって、老婆が何やら説明していた。占いらしい。さらに人びとをすりぬけるようにしてい

くと、本尊カリー女神に捧げる「いけにえ」の山羊の首をきる場所があって、私達が行った時にはあたり一面生々しい血が流れていた。ジャイン寺はジャイナ教の寺で一八六七年建立。カリー寺が貧しい民衆の生ぐさいニオイを感じさせるのに反し、この寺は美しい庭に面し建物の内外は、全て寶石、色硝子、銀などが埋めこんであり、阿弥陀經にのべられている七宝の宮殿のようなはなやかさであった。入場料をとるせいか、おまじりの人びとは服装のいい家族づれが多かった。

午後は日本寺建立の挨拶に西ベンガル州知事公邸へ行く予定であった。ちょうどその日知事公邸で大菩提会の孤児院へ日本の立正佼成会から、ニッサンのマイクロバスが寄贈されるが、当事者がいないので同じ日本の仏教会であるから、ぜ



1427年建立 (カトマンズ)
ドウルバル広場の旧王宮

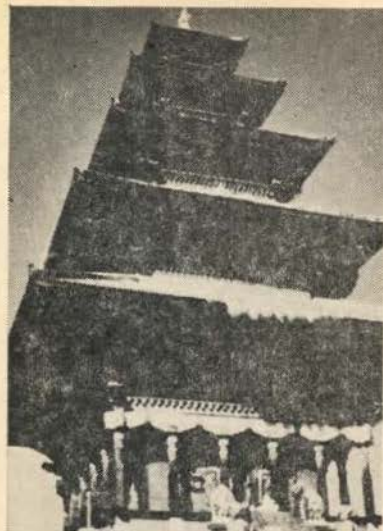
ひ献呈式をと招待状を受けていた。自動車五台で乗りこむと、公邸のテラス前にはすでに知事、ジナラタナ大菩提寺住職以下インド僧、各国仏教徒代表、それにシッキム国王、日本総領事などが待ちうけておられた。現地の新聞社のカメラマンもいて、その様子が後でわかったが、日本テレビの国際ニュースに出たとのこと。式後マイクロバスと一緒に白バイ先導、ノンストップにて大菩提会へいき、釈迦本尊前にて読経献灯する。歓迎をうけレセプションにて清水順碩副団長が挨拶をされた。

翌早朝、一行中で若い藤本泰弘氏と九品仏の和石材店主和田一男氏とスラム街を見学し、わからないように写真をとることで望遠レンズをつけて七時頃ホテルを出た。まちの人達が通表りの公共水道で、朝の楊枝をつかったり、体を洗ったり洗濯をしていた。裏通りへ入ると、まだ開かない店の軒下で家のない人びとが路上にねている。しばらく行くと私達は赤子をだいた女の物乞いにつかまった。最後は私の服をつかまねばかりについて来て何やらいっている。手まねからすると、子供に食べるものということらしい。私はズボンのポケットの中で、一ルピーの紙幣をクチャクチャにしてつかむと、わからぬように渡した。附近には他にいないので、やれやれと思っていると一分もたたぬうちに続いて二人につ

かまった。しかしきたくないとかいやな感じという気持はおこらず、かえってインドを身近に感じた。話に聞いていた通り、場所にしても人間にしても、「貧」と「富」の差が大きいことを実感した。午前十時荷物をまとめて空港へ。(出発から帰国までの間、手廻り品以外は重いトランクを一度も持たなかったのは有難かった)

△カトマンズ△

二月十二日午前十一時三十分ネパール航空機でカルカッタを飛び立つ。一時間位してガンジス河上空を通過すると次第に山岳地帯に入る。高度四五〇〇呎。晴れていてどの山の頂



パワニー神殿(カトマンズ)

上も段々畑で耕されているのが見える。頂上近くに一軒家があるが、どのような生活をしているのであろうか。やがて雲上にヒマラヤ連山が見えたと思うと、ほとんど高度を下げずにカトマンズ飛行場へ着く。高地であることがわかるような雨やかな風、澄んだ空気である。税関後タクシーに分乗して市内見学に向う。モノアラ河を渡り、カトマンズ車南十四キロのパドガオン市に入る。パドガオン(Padgaon)はグルカ朝以前の古王朝のあった寺の多い町で、そのドウルバル広場(Durbar square)には仏教、ヒンドゥー教の寺院が二十以上も集まっているという。先ず十八世紀のマルラモ王朝の「黄金の門」が目を引く。その前には王の黄金像が高くそびえている。ここでは広場や道は寺院の境内のような感じで、いたるところにヒンドゥー教の塔や神像や獅子像などがあった。二十世紀の今日ではとても考えられない夢のようなまちであった。とくに十八世紀の初に建てられたというパワニー神殿は、カトマンズにおける代表的木造五重塔でその大きさはすばらしい。自動車につてボディーナート寺(Bodhi Stupa)へ行く。これは仏教といってもラマ黄教の寺でチベット僧が多かった。釈迦はこの派の七代目であるといっていた。この寺の屋根は半円形で、その上に大きな仏陀の顔をかけた塔がたっている異様な寺である。寺の周囲には沢山の経

筒があり、これを廻して拌むという。僧のほとんどがチベットから亡命してきたので、せまいレンガ造りの庫裡は満員のようであった。さらに自動車でしばらく行くと、ガンジス河の上流というきれいな川に面してバシユバティナート寺（黄金寺）に着く。ここはヒンドウ教の聖地ともいわれ、シバ神を祭つてあるのか寺のまわりには、リンガ（性標）の祠が沢山あった。午後六時頃市内をぬけて最近建ったばかりのソールティーホテルへ着く。赤い軍服をきて刀をさした可愛い少年のボーイが二人笑顔でむかえる。部屋も食堂もすばらしい。食堂へ行くと日本曲を演奏して迎えてくれた。ネパール人は日本人によく似た顔をしており日本人には好意を持っていることが感じられた。

翌二月十三日午前四時半、真暗な中を自動車に分乗して支那公路（中共の援助で完成したチベットへ通ずる路）を猛スピードで一路ダマン峠へ走る。月はまだ空に高く冷気が身にしみる。約一時間半で峠の展望台へ着く。早朝なのに若い政府の観光課の職員が案内してくれた。七時頃日がのぼりはじめ。雪におおわれたヒマラヤの連峰が目前にうかんできた。三千年の昔、二十九才の釈迦は当時雪山（せつせん）とよばれたこのヒマラヤを見ながら、カピラ城をぬけ出て再び帰ることがなかったという。左に見える一番高い峰がランタ



カトマンズの民家（下は床屋）

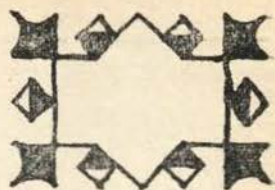
ン峰とのことであつた。帰途ネパール人の案内者の好意で、ドルケル・ボネバ（郊外の小さな町）の朝のバザールを見

る。自動車をおりて自由行動。観光客が入りこまないせいか土産物はないが、日用品、食料品、腕輪など全て珍らしいものばかり。街頭で小麦粉を油であげてカシの葉にのせた食物を一同で試食する。空腹のせいかおいしい。貧しいような町であつたが、一人も物乞いはしなかった。レンガをしいたせまいくずれかけた道路も、それに面したレンガ造りの二階建ての民家も、その窓飾りの彫刻といい柱といいなにか風情があつて歴史の重さを感じさせる。興味しんしん本当に楽しいぶらぶら歩きであつた。やがて自動車は古都バタン市へより、ヒンドウ寺院、仏教黄金寺等を見る。この黄金寺では仏像や菩薩像に多くの信徒がおまいりをしていた。

（つづく）

開宗八百年記念を迎えて

法然上人鑽仰運動を高めよう



—東京でのつどい—

達丈、松川文豪、佐藤密雄、佐藤良智、竹
中信常、村瀬秀雄、安居香山、宮林昭彦、

佐藤行信、長谷川宣丈（順不同）

であつた。この外に、当日欠席ながら、この
運動に全面的協力を寄せられた巖谷勝雄、戸
田恭善、中島真哉の各氏があつた。

三時間余りにかけたこの会の中で、現代の
諸問題が分析され、従来の鑽仰運動のあり方
が反省され、更に将来への在り方等が検討さ
れた。何としても大いに推進しなければなら
ない事は、雑誌浄土をもっと広く読者を求め
て頒布し、これを通じて鑽仰運動を推進すべ
きだという事で、その方法についていろいろ
と意見が出された。意見のおもなものを二三
拾つてみると次のようなものである。（敬称

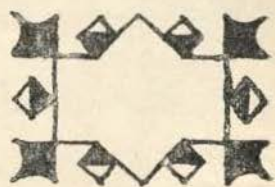
とこうした信仰雑誌の発展を阻害し、低級な
週刊紙やいかかわしい赤本の氾濫となり、日
本人自からが、宗教を疏外している傾向が強
い。一面、こうした間隙をぬった新興宗教が
相変らず大きな顔をして横行している。こう
した中で、近く開宗八百年を迎えようとする
とき、何としても、法然上人鑽仰運動を強力
に推進しなければならぬ。それは、単に浄
土宗という如き狭い見での事でなく、日本
人の問題、現代人の問題として、緊要のこと
である。

法然上人鑽仰運動は、開宗八百年を迎えよ
うとするこの頃、とみに盛んになってきた。
とくに知恩院を中心とした「おてつぎ」運動
は、まことに活発なものがある。しかし、新
しい時代に即した上人鑽仰の運動は、早く、
いまから三十年前に、法然上人鑽仰会が、故
真野正順博士を中心として展開され、今日な
お綿々と続けられている。本誌「浄土」の発
刊はその一つで、戦中戦後の困難な時代にも
めげず、苦難を乗り越えつつ今日に至ってい
る。又鑽仰会から出版されている信仰本の数
も数多い。

しかし、時代の趨勢と共に、この運動は必
ずしもその歩調を共にしているとは言えな
い。特にレジャーの各面の利用は、ともする

こうした反省から、去る五月十七日、この
運動を強める為の有志の会が、東京のパレス
ホテルで開かれた。参集した人々は、

大河内隆弘、稲岡寛順、清水順碩、久米原



略)

福岡—東京には、四百五十からの浄土寺院がある。これを根城として、住職に愛宗護法の念を強めてもらい、雑誌を一冊でも多く頒布してもらわなければならない。東京を中心として、次第に関東全域に、更には四方へと進むべきだ。西のおてつき運動に呼応するのは、この鑽仰運動だ。

大河内—雑誌浄土は、歴史もあり、価値のあるものである。三十余年の歴史を無にしてはいけない。しかし、時代は変ってきている。もっと若い人にも楽しんで読めるものとして、どんどんそうした人に読んでもらわなければならない。かつては一万部も出ている、本屋の店頭にも出されたのだ。あの意気で、はだしになってもこの頒布に努力すべきだ。

清水—私は又別の面でこの雑誌の意義を認めた。在家の人々には在家の人なりにこれをよめば信仰の問題が分り、僧侶にはそれを読めば、そのまま説教にもなる様な現代風なものをもってこれに盛り込んで、僧

俗で読めるものにして、運動を巾広く進めて行き度い。

久米原—その為には何としても組織が大切である。運動を推進する為には金もある。その為には上下各種の維持組織をつくりそれを中心として、運動の展開をはかるべきだ。新興宗教にしても、組織と、その組織が生み出す金の力で運動は更に盛り上っている。

松川—組織という事になれば、組合の組織などにも食い込むべきである。その為には労働者などにも身近な問題として考えられるものに、この雑誌を育てねばならない。そして、組織を通じて、この雑誌が頒布されて行くべきである。

どの発言も、現在浄土誌が持たねばならぬ肝要事を訴えたものである。いまここでは、更に述べられた多くの意見を、すべて掲載することはできないが、これらの人々の鑽仰運動に寄せられた情熱は、並々ならぬものがあった事を、その任に当る者は身にしみに感じ取った。

この日のつどいを有意義なものとする為、この日参集をした人に、又参集を予定された人々をも含めて鑽仰運動の同人とすることとし、こうしたものを母体として、何回かに分けて、同志の人々を呼びかける会合を開き、一人でも多く、同人を集え、この運動の展開も積極的に進める事となった。又内容面についても、編輯担当者が、上掲のごとき諸意見を出来る限り取り入れ、そうした運動に適した編輯をする事と申し合わせた。

いかなる運動も、口先だけでは出来るものでない。又こうした宗教運動は、先づ一つ一つの実践が必要である。浄土誌が二十数年間続いて来た事自体、尊い実践に違いないが、それが更に広く推進せられてこそ、その意義もあるとせねばならない。この意味において、今回の有志による東京のつどいは、まさに意義深いものがあつた。

これを機会に、鑽仰運動が躍進する事を願うと共に、読者を含めた同志各位が開宗八百年の意義を、本当に認めて、自から一隅を照らす者として、協力あらん事を切に願って、この報告を終りたい。



— 開教使 —

今回は開教使の生活に関連して述べたいと思う。風俗、習慣、言語の異なる土地において布教するためには、まず、これらの全てをある程度理解し、修得しなければならない。これらのものになじめない限り、布教の効果は少ない。日系二世・三世・米国人に対する場合は特にそうである。仏教開教使の使命は大きい。それは仏教という東洋の一角に顕われ、今なお存在している精神文化を、ただ単に、本を通じ、頭のみで理解するものでなく、手足を動かし体を通じ、人格的接触を通じて、現代文明の最尖端を行く米国に地に伝えるという使命である。仏教は西洋文明の中では発達しなかった尊

アメリカに於ける 開教使終えて

— 5 —

前ロスアンゼルス
浄土別院布教師

伊 藤 正 穩

く、且つ、深遠な精神文化を持っている。

— 読経について —

しかし、つい最近までは、われわれはその伝達方法に適切を欠いていたため、仏教をして前近代的であり、劣った宗教と考える人々もあり、仏教徒二三世の中にも、世界における二流の宗教という感じをもち、仏教徒であることに劣等感さえもっている人もあった。彼等の訴えによれば、その理由の一つはお経の読誦である。全く意味の判らぬ音の連続は、真面目に仏教徒になろうとする人、すなわち、人生の指針として仏教を理解し、信じて行こうとする人には、大きな障害になっているようだ。われわれはこれに対して、一応、読経は

儀式の一部であると説明はするが、しかし、お経も意味の判るように読んではいけないものだろうか。判らぬものが有難い、という習慣は、東洋の思维にはかなり根強く残っているようであるが、又、前近代のセンスという事も出来よう。特に、宗教的真理は理性によつては得られず、それはただ心的直観によるのみとして、こうした考え方が、わけが判らなくとも（すなわち、理性で理解できなくとも）やれば自ずから理解できるという風にしてしまい、読経も色々な意味があるうが、その一つには、かくのごとく意味がない音の連続が、ある特殊な宗教的意義を与えるというような考えにもとづいているのではないかと思われる。しかし、現代人の一般的思考の方法はまず理性に訴え、その門を通過して直観の世界に入つて行くということが考えられるのではないだろうか、最も伝統を重ずるカトリック教でさえも、かつては、世界共通のラテン語で読まれた部分も、現在では各国語に訳され使用されている。時代は急速に変化、進歩している。特にのびのびと人間の自由を享受している米国においては、このことを見逃がすことはできない。

一つの精神文化が新しいそれとは異った文化圏に入つて価値あるものとして存続して行くためには、新しい変化をきたすものである。そこにおける伝道者の努力は、自分の伝統文

化の中に新しい価値を見出すことによつて、進歩発展を遂げるものである。

この意味において、仏教が米国に入つて発展するためには、仏教の上にも、米国精神文化の上にも新しい極面を与える尊い意味があるのである。しこうして、米国という異った文化圏において、仏教の尊さを生かすためには、まず、彼等の思维方法を理解し、それに従つて仏の教えを説くことが肝要である。このことがなければ、仏教が世界一流の宗教であると自負高言した所で、それは画餅にすぎないであろう。

——米国人の思维方法——

では、米国人の思维方法、あるいは理解の型は何か、これについて語ることは簡単なことではない。基本的にわれわれが知らなければならぬことは、合理的、または組織的ということであろう。仏教教義はもちろんの事、仏教儀式、作法装飾等にいたるまで、その背後にある宗教的、人間存在の底に流れる尊い意味を合理的に説かなければならない。また、仏教には非合理的な考え方、表現方法、習慣がある。われわれは、この一見非合理的なものが真実を表わしているということ、合理的に説明しなければならぬ。禅における問答、空、無の思想、浄土の表現などはその典型である。この

ことは、別に米国に限ったことではない。現代日本においても必要であると思われる。しかし、異質文化圏に入る時は、特に詳細な説明が必要である。

こうしたことを充分心得ていない限り、(すなわち単なる直訳的仏教では) 仏教の内に秘めた尊い宝は、日に目を見ず、また、米國精神文化に役立たぬままに終ってしまいう。しかし、幸いにして、現在は、日系二三世開教使、白人の深い協力者によって、着実に米國仏教の礎が築かれている。

— 健 康 —

先にあげた風俗、習慣、言語は一口に言えば簡単なことであるが、その修得はどれ一つとして容易なものはない、頭で学んだだけでは足らない幽霊的理解にすぎない、体全体で自然に学ばなくてはならない。開教使たるものはこうしたものを素直に受け入れられるだけの順応性が必要ではないかと思う。その上で、宗教、仏教、各宗派の教義などに関する一般的知識が要求される。しかし、何んといつても、一番大切なのは健康であろう。八年有余無事開教使を努めることができたのも、このお陰だと感謝している。

私が出発する際、何人かの人が「ホームシックにならぬよ

う気をつけよ」と忠告された。しかし、幸い私にはそのような病気になるひまがなかったといえる。

開教使の生活は時間に制限がなく、時間が一定もしていない。電話がかかればすぐに走って行かねばならない。ある晩、夕食をすませてメンバーの病氣見舞に行き、十一時頃、寺に帰ってくると、待ってましたとばかり電話がかかり、今から柵経に来て欲しいということ出かけた。葬儀の詳しい打合せ、その他の用件をすませて帰ったのは午前二時頃であった。また、一年に二回、羅府から約百七十五哩(二百八十料)ほど離れたアリゾナの近くにあるサーマルという所に出張説教に出かけるが、そんな時は、午後、寺を出て帰るのは夜中、あいにく新幹線はないので自動車である。

今晩はゆっくりと映画にでも行こうかと友人と約束しながらも、突然の公用で行けなくなることもある。そんな時は腹も立つが公用は止むを得ぬ、しかし、人に頼られて、その人のために何かができるということは、考えて見ると幸せなことである。

— 休 日 —

一年三百六十五日のうち、休日は七月四日の独立祭、十一月の第三木曜日の感謝祭、十二月二十五日のクリスマスであ

る。この三日には、少々朝寝ができる。その他の日は毎日出勤である。私の場合、一週に定った休みの日はなかった。その代り、勉強はできるだけさせて頂いた。それが実って南カリフォルニア大学の修士課程も卒業することができた。

この休日だが、感謝祭とクリスマスには、あるメンバーの家に招待されて行くことになっていた。この日は、料理を作らなくとも美味しい御馳走が頂けるだけでも気持ちの上でゆっくりする。こんなことをいっても何のことか判らない人もある。私の場合、滞米中は原則として自炊であった。出発前、別院の主監である野崎靈海師よりその旨連絡があった。しかし、内地にいる間は、多くの男性がそのように、仲々、料理は習えなかった。すなわち、料理については何も知らないままに渡米してしまつた。渡米直後は様子も判らず、クック(料理)もできないので野崎先生の宅に夕食を御世話になり、教わつたものである。このことを知る人があるかどうかは知らないが、野崎先生は実に料理の上手な方である。チャ―シューやエビの天ぷらは天下一品と思われる。最初の内は週に三日か、四日程、夕食を御厄介になつたが、段々料理もなれ、自分自身の仕事もふえてきたので、帰国する頃は、日曜日の夕食を共にさせて頂くことにしていた。このことは、ただ料理を覚えるということだけではなかつた。一人ぼっち

の若者である私に、少しでも暖かい家庭の雰囲気の中に入れてあげようという先生の細い心づかいであつた。私がホームシックにかからないですんだのも、一つにはこのお陰であつたと感謝している。

——孤独と忍耐——

他人の中の一人ぼっちの生活がどんなものであるかは、それを実際に体験してみなければ判るものではない。寺院生活を通じての外地の生活は緊張の連続である。強い意思の力を必要とするものである。外地での一人での生活はだれにも束縛されない自由なものと考えたり、旅の恥はかきすてという生活をする人もあろうが、開教使の生活ではそうしたことは許されない、そこには時として、孤独で殺風景なものしかない、このすき間を通して入って来る風に負けると、開教使のつとめは遂行できない。うるおいと温み、愛と理解は疲れ切つた心と身をいやす大きな活動力であることを知らされた。

北米浄土宗別院の開教使は、物心両面に多くの問題をかかえつつ、吉水の法灯を伝えんと異国の地で涙ぐましい努力が続けている。そして、そこでは、常に忍耐と犠牲、信念と努力が要求されている。以上私自身の感想を被歴させて頂きまし誌友の参考になれば厚甚でございます。



四苦八苦——その十

琴の糸

渋谷賢 応

お釈迦さまがおきとりを開かれる動機となりました四聖諦の中の苦諦を、お釈迦さまの直説に近いと言われる中阿含經によつて學んでまいりました。四聖諦とは苦諦、集諦、滅諦、道諦を言い、苦諦とはこの生、老、病、死の四苦に怨憎会、愛別離、所求不得、五盛陰の四苦を加えた八苦であつたわけでございます。したがいましてこの苦よりの離脱は、集、滅、道の過程を経てゆかなければならぬわけで、これには八聖道と言われる修行の道程があるわけでございますが、その一つ一つを拝読いたしますとき、さ

て私どものような機根の劣つた凡夫が、

はたしてこの道を踏み越えていくことができるかどうか、甚だ心もとなく思われるのでございます。

お釈迦さまのお弟子の中にも、シャリブトラ尊者やアーナンダ尊者のようなすばらしい方ばかりおられたわけではございません。道に志しても中道にして退転してしまう方もあつたわけでございます。次に述べますソナーコリビサ尊者もその一人であつたわけでございます。

お釈迦さまが祇園精舎におられましたときこのソナーコリビサ尊者もこの地にこられ、修行の地をその墓地に求めて夜となく昼となく一心に学習して眠ることさえしませんでした。

た。そして安靜に坐禪しておられました。がふとこのような考えを起されたのでした。

「私は今一心に行にはげんでいる。釈尊の弟子の中でも修行のきびしさからすれば今のところ私に次ぐ者はないであらう。ところがどうしたか私は修行すればする程、次から次に煩惱が起つてどうしてもそれからのがれることができない。これより先幾年行を重ねても道を成することは私にはできそうもない。考えてみれば私の父母の家は大変裕福である。悟りに至ることのおぼつかない道を、こうまで苦勞してはげむことはいかにもつま

らない無駄ことだ。ひと思いに戒を捨てて家に帰り家業にはげむことにしよう」

こう思っていますとすぐにそのことが他心智をもつておられるお釈迦さまの心に知れてしまったのです。

「彼をつれておいで」

お釈迦さまは傍の弟子に申されました。すぐに尊者はお釈迦さまの前にひざまづいたのです。

「ソナーコリピサよ。お前はいま、一心に修行しつつ煩惱にさいなまれて道を捨て、成道できないとあきらめて、裕福に暮す父母のもとに帰りたいと思つていたね」

このようにすっかり師釈尊に自分の心を見ぬかれてしまった尊者は、わが心の恥しき、自分の不甲斐なさで身のおき所もありませんでした。

「釈尊よ、よく私の心をお見通しでございます」

そしてお釈尊さまの前にひれふして

「その通りでございます」と申し上げたのでした。

「私は今お前に聞くから素直に答えておくれ、お前がまだ家にいた頃、琴を弾じて歌を歌ったことがあるね。琴は歌に随い、歌は琴に随つて楽しむことができたのだね」

「その通りでございます」

「もし琴を急に弾じたなら、いい音が出ただらうか」

「出ません」

「もし緩すぎたなら」

「それもだめです」

「そうだ、その通りだ。急ならず、緩ならず、適してその中を得たときにこそ和音として楽しむことができるのだね」

「そうです、その通りです」

「仏道修行も同じことだ、あまりに急ならば心を乱してしまい、緩ければ怠けてしまう。急ならず緩ならず、その人の分に應じて修行するときはじめて成ぜられるものなのだよ」

ここに至つて尊者は心に悟る所あり、つい

に アラカンとなることができたと言われ
てあります。(中阿含經百二十三、沙門二
十億經)

私ども浄土の教を仰ぐ者にとって、この琴の糸は何とお受け取りしたらいいのでしょうか

「衆生ほとけを礼すれば、仏これを見たまう。衆生ほとけをとなうれば、仏これをききたまう。衆生仏を念ずれば、仏も衆生を念じたまう」

われわれ凡夫の身にあつて苦を難航するの道は、阿弥陀さまの糸をお念仏によつて弾するより他はないと思ふのです。悩みが深ければ深いだけ、大きく、また深くお念仏をおとなえするより他はないと思ふのです。そうすれば必ず、それに應じて阿弥陀さまの糸が私たちをなぐさめて下さることでしょう。凡夫は凡夫なりに煩惱になやむ身はそのなやむ身のまゝ、ただお念仏をおとなえてゆきたいものでございます。

浄土の人々の諸々相



村 瀬 秀 雄

△「浄土の人々の姿」

もし私が仏になったならば、浄土には地獄、餓鬼、畜生の三惡道がないようにしたい。もしこれができなかったならば仏にならない。¹

もし私が仏になったならば、浄土の人々が再び三惡道におちることのないようにしたい。もしこれができなかったならば仏にならない。²

もし私が仏になったならば、浄土には不善の者がなく、不善の名すら聞くことがないようにしたい。もしこれができなかったならば仏にならない。³

もし私が仏になったならば、浄土の人々の身体は、すべて真金色にしたい。もしこれができなかったならば仏にならない。⁴

もし私が仏になったならば、浄土の人々の姿や形に好醜の差別がないようにしたい。もしこれができなかったならば仏にならない。⁵

もし私が仏になったならば、浄土の人々はすべて三十二相を見えるようにしたい。もしこれができなかったならば仏にならない。⁶

もし私が仏になったならば、浄土の人々は衣服が心のままに得られ、裁縫したり、酒したり、染めたり、洗濯したりする必要がないようにしたい。もしこれができなかったならば仏にならない。⁷

もし私が仏になったならば、浄土の人々は宿命通を得て、百千億那由他の苦にさかほって自分の宿命を知るようにしたい。もしこれができなかったならば仏にならない。⁸

もし私が仏になったならば、浄土の人々は天眼通を得て、百千億那由他の諸仏の国が見られるようにしたい。もしこれができなかったならば仏にならない。⁹

もし私が仏になったならば、浄土の人々は天耳通を得て、百千億那由他の諸仏の説法を聞いて記憶するようにしたい。もしこれができなかったならば仏にならない。¹⁰

もし私が仏になったならば、浄土の人々は見他心通を得て、すべての国にいる他人の心中を自由に見通し、その考えを知るようにしたい。もしこれができなかったならば仏にならない。¹¹

もし私が仏になったならば、浄土の人々は

神足道を得て、瞬時の間に百千億那由他の諸仏の国土を往来できるようにしたい。もしこれができなかったならば仏にならない。¹²

もし私が仏になったならば、浄土の人々は妄念を起さず、わが身を執着することのないようにしたい。もしこれができなかったならば仏にならない。¹³

もし私が仏になったならば、浄土の人々は阿羅漢と同じ快樂を受けるようにしたい。もしこれができなかったならば仏にならない。¹⁴

もし私が仏になったならば、浄土の人々は更に修行を積んで必ず悟りの境地に達するようになりたい。もしこれができなかったならば仏にならない。¹⁵

もし私が仏になったならば、浄土の人々は無限の長寿を保つようにしたい。但し自ら本願をおこして他の国土に往くものは除く。もしこれができなかったならば仏にならない。¹⁶

註

1 これを第一、無三惡趣の願という。最も嗣しい苦しみを救うための願である。法然上人はすべての願は法藏比丘の選択の結果であると解釈されたが、この願について

も「第一に無三惡趣の願とは、親見する所の二百十億の土において、或いは三惡趣あるの国土あり、或いは三惡趣なきの国土あり。即ちその三惡趣ある粗惡の国土を選捨して、その三惡趣なき善妙の国土を選取るが故に選択というなり」（選択本願念仏集）といわれた。

2 これを第二、不更惡趣の願という。ここにも法然上人は選択を説いた。即ち「第二に不更惡趣の願とは、彼の諸仏の土において、或いはたとい國中に三惡道なしと去りてまた三惡趣にかえるの土あり。或いは惡道にかえる粗惡の国土を選捨して、その惡道にかえらざる善妙の国土を選取るが故に選択というなり」（選択本願念仏集）といわれた。

3 これを第十六、無諸不善の願という。不善とは不具、惡人等のこと。

4 これを第三、悉皆金色の願という。法然上人はこの願の選択について

「第三に悉皆金色の願とは、かのもろもろの仏の土において、あるいは一土に黄

白二類の人天あるの国土あり、あるいは純黄金色の国土あり。即ち黄白二類の粗惡の国土を選捨して、黄金一色の善妙の国土を選取るが故に選択というなり」（選択本願念仏集）といわれた。

5 これを第四、無有好醜の願という。法然上人はこの願の選択について

「第四に無有好醜の願とは、かの諸仏の土の中において、或いは人天の形色、好醜不同の国土あり、或いは形色一類にして好醜あることなきの国土あり。即ち好醜不同の粗惡の国土を選捨して、好醜あることなき善妙の国土を選取るが故に選択というなり」（選択本願念仏集）といわれた。

6 これを第二十一、三十二相の願という。三十二相は仏が具えている瑞相のこと。例えば手足が柔軟であり、音声と雅にして遠近に聞え、眉間の白色毫から光明を放つ等の三十二の相好のこと。

7 これを第三十八、衣服隨念の願という。

8 これを第五、宿命智通の願という。宿命通は六神通の一つで、前生のことを知る

智力をいう。

9 これを第六、天眼智通の願という。天眼通は六神通の一つで、一切のものが自由に見られる智力をいう。

10 これを第七、天耳智通の願という。天耳通は六神通の一つで、一切の言語が自由に聞かれる智力をいう。

11 これを第八、他心智通の願という。見他心通は六神通の一つで、他人の心中を自由に見通す智力をいう。

12 これを第九、神境智通の願という。神足通は六神通の一つで、自由に飛び廻ることのできる智力をいう。

13 これを第十、速得漏尽の願という。浄土の快樂は肉体的官能的快樂でないという意味である。

14 これを第三十九、受樂無染の願という。阿羅漢は煩惱を断じつくした比丘のこと。

15 これを第十一、住正定聚の願という。正定聚は仏道を修行して邪道におちることがなく、必ず仏になる位をいう。

16 これを第十五、眷屬長生の願という。

自ら本願をおこすのは、他の国土の人々を救いたいという本願のことをいう。

△二 浄土の声聞▽

もし私が仏になったならば、浄土に無数の声聞がいて、数えても数えきれない程に多数にいるようにしたい。もしこれができなかったならば仏にならない。¹

註

1 これを第十四、声聞無数の願という。声聞は小乗の修行を行う者のことで、浄土には小乗の者も同じくいるという意味。

△三 浄土の菩薩の姿▽

もし私が仏になったならば、浄土の菩薩たちは諸仏に供養しようと思えば、仏の力によって一食の數に無数無量の諸仏の国土に行けるようにしたい。もしこれができなかったならば仏にならない。¹

もし私が仏になったならば、浄土の菩薩たちは諸仏に供養しようとするならば、供養したい物を自由に得られるようにしたい。もしこれができなかったならば仏にならない。²

もし私が仏になったならば、浄土の菩薩たちは十方無量の諸仏の国土を見ようと思えば浄土の宝樹の中において見られ、明鏡に己れ顔を映すようによく見られるようにしたい。もしこれができなかったならば仏にならない。³

もし私が仏になったならば、浄土の菩薩たちは無数の光で輝き、高さが四百万里もある道場樹が見られるようにしたい。もしこれができなかったならば仏にならない。⁴

もし私が仏になったならば、浄土の菩薩たちは聞きたいと欲する教法を自由に聞くことができるようにしたい。もしこれができなかったならば仏にならない。⁵

もし私が仏になったならば、浄土の菩薩たちは金剛力士である那羅延身のような強力をもつようにしたい。もしこれができなかったならば仏にならない。⁶

もし私が仏になったならば、浄土の菩薩たちは一生補処の位にあつて、直ちに普賢菩薩の徳を修めるようにしたい。しかし菩薩の中で誓いをたて、多くの人々を救うために功德を積み、諸仏の国土において修行を積み、十

方の諸仏を供養し、そして人々に対して無上正眞の道を求めしめようとする菩薩を除く。もしこれができなかったならば仏にならない。⁷

もし私が仏となったならば、浄土の菩薩たちは經典を誦誦して弁才智恵を得るようにしたい。もしこれができなかったならば仏にならない。⁸

もし私が仏となったならば、浄土の菩薩たちは限りない智恵と弁才を得て、自由に説法できるようにしたい。もしこれができなかったならば仏にならない。⁹

もし私が仏になったならば、浄土の菩薩たちは自由に一切智を演説できるようにしたい。もしこれができなかったならば仏にならない。¹⁰

註

1 これを第二十三、供養諸仏の願という。一食の間は極く短い時間のこと。

2 これを第二十四、供具如意の願という。供養物は衣服、飯食、臥具、医薬がある。

3 これを第四十、見諸仏土の願という。

4 これを第二十八、見道場樹の願という。道場樹は悟りの場所をあらわす樹のこと。

5 これを第四十六、随意聞法の願という。

6 これを第二十六、那羅延身の願という。

7 これを第二十二、必至補処の願という。一生補処は直ちに仏になるべき位にいること。善賢菩薩の徳は仏の功徳を成就するための修行のこと。無上正眞の道はこの

上ない菩提心を求める心のこと。

8 これを第二十九、得弁才智の願という。弁才智は義理をよくわきまえる才能のこと。

9 これを第三十、智弁無窮の願という。弁才は弁舌の才能のこと。

10 これを第二十五、説一切智の願という。一切智は一切のことを知りつくす智恵のことで、仏智と同じ。

八四 浄土以外の人々について

もし私う仏になったならば、浄土以外の国

土にいる人々は私の光明に照らされて身心柔軟となり勝れた人となるようにしたい。もしこれができなかったならば仏にならない。

もし私が仏になったならば、浄土以外の国土にいる女人たちで女人であることを厭う者は私の名号を聞き浄土に往生したいと発欲するならば、浄土に往つてから女像をうけることがないようにしたい。もしこれができなかったならば仏にならない。

もし私が仏になったならば、浄土以外の国土の人々で私の名号を聞き菩薩の行を修するものはすべての人々から尊敬されるようにしたい。もしこれができなかったならば仏にならない。

もし私が仏になったならば、浄土以外の国土の人々で私の名号を聞くものは無生法見と深總持を得るようにしたい。もしこれができなかったならば仏にならない。

註

1 これを第三十三、触光柔軟の願という。身心柔軟とは阿弥陀仏の光明に浴して身も心も柔しくなり、貧りと怒りと愚かさの三毒が消滅して三善が得られること。

ある父と子の悲しい別離

過日、私はとても痛ましい葬儀に参列いたしました。四才になる男の子が父親が責任者となっている工事現場で不慮の最期をとげてしまったのです。

その父親の仕事はダムの建設・ビル新築等の基礎工事を請負って全国各地を点々とする、いわゆる、何々組と称する土木業者の責任者で大きな工事を主に行なっていたのです。ところが最近、各地で急ピッチで進められている宅地造成工事で、その工事人の不足から今度の仕事をたのまれ、私の住む近くの造成現場の責任者として初めてこの種の工事を請負い赴任して来たのです。

その立派なヒゲをたくわえた凄味のある顔だちとは裏はらに実に慎重な監督ぶりで、よく工事現場でありがちな人夫と住民とのいざこざやずさんな仕事ぶりなど少しも出さない見事な責任者として工事に當っておりました。

木々を切り開き、ブルドーザーがけたたましくうなる中に、日一日と工事は順調に進み、石垣を築き、やがて問題の下水道工事に移ったのです。それまで山から湧く清水がチョロチョロと流れていた小川は大きな土管にからえれることになったのですが、その工事のため深く深く掘れた川底は幾日か降り続いた雨のため満々と水を貯え、黒々とした口を開けていたのです。

父親は初めて請負う仕事故、事故を起してはならないと、毎日先頭に立って工事現場のすみずみまで点検を繰返していたのですが、思わぬところに落とし穴があったのです。それは下水道工事によってできた黒々とした水を含んだあの大きな口だったのです。

彼の四才になる長男は父親ゆずりの気性でも申しましようか、絶えず父親の後について広い工事現場のあちこちに行

き、その人気者となっており工事人からも、「満坊」「満坊」と大変かわいがられておりました。ある雨あがりの日、突然、人気者の「満坊」の姿が工事現場から消えてしまったのです。人々はまた大好きなジープに乗せてもらってどこかへ行ったのだらうと思っておりましたがそのジープには乗っていないかったのです。ことの重大さに気づいた工事人達は仕事を一時中断して「満坊」を探したのですが、「満坊」はしばらくの後、あのだす黒い水を満々と貯えた下水道工事の現場から変りはてた姿で、うつむき加減で水に浮んでいるところを発見されたのです。人々はその場にかけつけ立ちすくみ何をしてよいやら、ただ呆然と顔を見合せるのが誠いっばいだったのです。

その夜、痛ましい、物静かな通夜が営なれました。人々は悲しみをじっとこらえ応対している父親にお悔みのことはもなく、ただ静かに時のたつのを待つのみでした。あくる日の葬儀もそのようなもの悲しい中で行なわれたことは申すまでもありません。

私は火葬をしている間、少しでも悲しみをやわらげんものと父親に、この世の無常なこと、人としての悲しみ等についてお話し申し上げました。「満坊」はわずかに四才にしてこの世を去ってしまったのですが、大人が幾十年かの生活の中で

体験するであろう事項を四年の歳月に集約して体験し、そして去っていったであらうと。父親は両親との別離の際はこれも時の流れと思い、それ程の悲しみはありませんでしたが、今度という今度は言葉ではいいあらわせないものがございます。ましてや自分が責任者となっている工事現場のこと故、この怒りをぶち当てる人がいないのです。息子に対してはただ申し訳けないという気持でいっばいですが、ただ幸いに他人の子供を犠牲にせず息子がその身がわりとなってくれたと思っておりますと、その涙にゆがんだ顔つきの中でボソボソと話しかけてまいりました。

今、「満坊」は私の寺の納骨堂に静かに香のかおりの中に安置されております。人としてこの世に生れいずる限りいつかは死に直面いたします。しかし死ぬことのみを考えていたのではとても安穩な生活は送れませんが、これが現実の姿なのです。この死という現実を満足ある形で迎え得るためには各々の日々に充実した満足ある体験をする中でおのずから開けてくるものと思います。この幼ない子供の死によって、人としていかに生きることが大切であるか考えさせられたことはありませんでした。この死という現実を素直に考える心構えも常日頃から持ち合せることもまた必要ではないでしょうか。

お歌をいたたく

露の身はこゝかしこにてきえぬとも

心はおなしはなのうてなそ

(刺修外伝 第三十四)

建永二年三月十六日、法然上人はいよいよ京都を發つて配所に向われました。上人の日常は馬、車、輿などを用いることなく、いつも草履で歩かれていました。しかしこの時ばかりは七十五才というお齡であつたり、長途の旅というので輿に乗られました。このお輿をかつぐ者は、角張の成阿弥陀仏を棟梁として六十余人の僧がこれに当りました。上人を見送る人々は、これこそ今生の別れとなるかも知れぬという悲しみに涙を流すのでした。

この時のことを勸修御伝は

「御なごりをおしみ、前後左右にはしたがふ人、幾千万といふ事をしらず。貴賤のかなしむこゑちまたにみち、通俗のしたふ涙地をうるはす」

と記しています。特に上人との因縁が深か

った月輪殿九条関白藤原兼実の嘆きは一入でありました。そこで兼実は上人に書を送り、

ふりすててゆくはわかれのはしなれど

ふみわたすべきことをしぞおもふ

と詠われました。つまり上人を慕う事実を

都にふり捨て、配所に向われることは、永久の別れの緒(いとぐち)となることであるが、橋がものを渡すように、文を通して消息を聞くことができるようになりたいものであると、名残りを惜しみました。この歌に対してお答えになつたのが、巻頭のお歌であります。露の身は露のようにはかない身ということ、人の身をいいます。花のうてなは、極楽の蓮華台のことで、浄土に往生するという意味であります。そこでお歌は

人の身体は露のようにはかなく、都と配所というように、こことかしこに相隔つた所で消え失せることになつたとしても、心は同じく極楽往生を願うのであつて、いずれは蓮華台上に生れおわすことでありましよう。今は飯の別れというものであります。

という意味であります。

また黒谷源空上人伝には次のように記され

ています。

「月輪の禪定殿下、しばらく御離別の恨みを息んが為に、法性寺の小御堂に、上人を一夜逗留たてまつられけり。上人の給わく。

会者定離は常のならない、今はじめたるにあらず。なんぞ深く歎かんや、宿縁空しからずば、同一蓮に坐せん。浄土の再会はなはだ近きにより。今の別れはしばしの悲しみ。春の夜の夢のごとし。信も謗もともに縁として、先きに生れて後を導かん。引掛縁はこれ浄土の楽しみなり。それ現生すらなおもてうからず。同じく名号を唱え、同一の光明の中にあつて、同じく聖衆の護念をこうむる。同法もつとも親し。おろかにうとしう思しめすべからず。南無阿弥陀仏と唱へ給えば、住所は隔つといえども、源空と親しとす。源空も南無阿弥陀仏と唱えたてまつるが故なり。念仏をこととせざる人は、肩を並べ、膝をくむといえども、源空にうとかるべし。三業皆異なるが故なり」

お歌の意味は、このご法語と同じことです。が、このご法語をよく読んでから、お歌を味

ある質問

境内建物の課税について

〔問 い〕

私はある寺院の住職ですが、先年、庫裡を新築しましたところ、多額の固定資産税が課せられました。

いままでは固定資産税を課せられたことはありませんでしたし、他の市町村も調べましたが、免税になっておりました。

個人の資産でもない庫裡に課税されても税金は納めなければなりませんか。(福島・某寺住職)

〔答 え〕

宗教法人が、もっぱらその本来の用に供する本堂・庫裡などの境内建物や境内地、さらに墓地については、固定資産税は非課税とされております。

あなたの場合、寺が宗教法人になっているのですしたら、所有する庫裡が住職の居住用に専用する場合を除き、改築したといっても課税されることはありません。もちろん、他の市町村にある寺院の場合も同様です。

したがって、寺院が宗教法人になっていなければ、庫裡であっても固定資産税の対象となります。

施本『おぼん』 価 一〇円
一五円

B 6 変型

本文 8 ページ

送料 実費

◇お盆はわたくしたちの心に、郷愁にたなつかしい味を思いおこさせます。

◇とおい昔から、日本につたえられている行事をとおして、人びとの心のうちなる。仏心をそだてましょう。

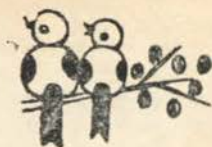
◇お盆とお施餓鬼についてやさしい解説の施本としておすすめします。

◇戸別に郵送なさるときは、定形郵便物として一部十五円で発送できます。

◇見本ご入用の節は郵券二十五円をお送りください。ご注文はお早目に。

発行所 大道社

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六
TEL 東京(〇三)二六二一五九四四
振替 東京 八二四七番



ピーターとおおかみ



プロフィエフ作品

音楽劇「ピーターとおおかみ」より

脚色 大正大学児童研究部

ピーター ばんざい、おおかみをやつけたぞ
一同よろこび合う。ネコ、いばつてオモチ
ヤの鉄砲でボンボンやる。

ネコ どうです。このいさましい姿、

小鳥一 アヒルさんをはやく袋から出してあげましょうよ。

木の影からピーターが袋をあけてアヒルを出す。アヒルよたよたと出てくるが、こわさのあまりふるえている。

ピーター さあ、アヒルさんもう大丈夫よ。

アヒル アワワワ……こわかった。命がちじ

まってしまったよ、まったく。

一同アヒルを囲むようにしながら話し合う。その話しにアヒルうなずく。

小鳥一 アヒルさん、こわかったでしょう。

ネコ もう大丈夫。平気のへいざつてとこね

小鳥二 本当によかったネ。

その時、本物の鉄砲の音が二、三発聞える。一同びっくりして無言のままあたりをキョロキョロ。しばらくして狩人、下手より登場。狩人はおおかみを見て鉄砲をかまえてねらおうとする。

狩人 あつ、あんな所におおかみがいるぞ。

今日こそ逃さないぞ。よしし。

ピーター、それに気づき大声でとめる。

ピーター うたないで、狩人さん

狩人 なぜだね、ピーター。

ピーター このおおかみはボク達がかまえたんです。

狩人 えっ！ 君達がかい？

それを聞いて狩人びっくり。信じられないといった口調。でもみんなはけんめいに狩人に自分達のことを話すそ

ネコ その通りよね。

小鳥一 あたし達、これでおおかみをからかったのよ、ブブブ……。

小鳥二 そうしたらおおかみさん、のびちゃったのよ、ドンドンドン……。

狩人 なるほど、なるほど。

狩人、やつと納得する。アヒルは自分を食べようとしたおおかみをこらしめようと、狩人にたのんで殺してもらおうとするが、ピーターが動物園へ持って行こうというのでアヒルも同意する。

アヒル 狩人さん、鉄砲でおおかみを打つて下さいな。

ピーター ダメだよ。このおかみは動物園

へ連れてった方がいいよ。みんなどうだい。

ネコ 結構よ。それに大賛成ってことよ。

小鳥一 私もその方が悪い事できないと思うわ。

小鳥二 私も賛成よ。

アヒル じゃ動物園へ入れて二度と出られないようにしてくださいヨ。

狩人 よし、しっかりしばって連れて行く。

う。二度と悪いことをしないように。

ネコ、おかみの使った手押し車に気づいて狩人の所へもって行く。

ネコ これにのせて行くってステキじゃない

狩人 これはいいな。では出発だ。

狩人、よろこんで気絶したおかみを車に

のせて出発しようとする。そこへ心配にな

って息をきらしておじいさんが走って来

る。上手より一同おじいさんを見る。

おじいさん ピーター、ピーター。

ピーター得意そうに、おじいさんにおおか

みを見せる。

ピーター おじいさん見てよ。ボク、このお

おかみをつかまえたんだよ、すごいでしょ

う。

小鳥一 ピーターは強かったわよ。

ネコ まったく最高ね。

狩人 実に勇気のある子だね、おじいさん。

おじいさん、みんなが無事なので安心するが、ピーターが約束を守らなかったので注意する。

意する。

おじいさん ピーター、お前は私のいつけ

を忘れたのかい？

ピーター ごめんなさい。おじいさんボク忘

れてないけど……アヒルさんをどうしても助

けてあげなかったの。

アヒル おじいさん。あたしや、ピーターの

おかげで助かったんですよ。本当によかつ

た。

おじいさん そうかい、でもこれからはだま

ってお家を出てきてはいけないぞ。

ピーター はい、おじいさん！

おじいさん それでこそ私のピーターだ。

みんなの言い分を聞いていたおじいさんは

ピーターがどういう気持ちでやったかを知り

安心する。おじいさんはピーターの元気の

よい返事にニコニコしている。

狩人 みんな一緒にアヒルさんを助けたのは

感心だけど、君達だけで森へ来るのは本当

にあふないことだったのだよ。分ったかい。

小鳥一 ええ。私達とってもよかったもの

小鳥二 あの時夢中だったよ、ボク。

ネコ 非常にこわかった感じネ。

ピーター ボクだってそうさ。でもみんなで

力を合せたからできたんだネ。

おじいさん 強いぞ、ピーター。

ピーター うん。

小鳥達 アヒルさん、よかったネ。

アヒル みなさん、どうもありがとう。

ピーター さあ、これから動物園へおかみ

を連れて行く。

狩人 動物園へ出発だ。

ピーター みなさん、さようなら。

一同 さようなら！

ピーター・小鳥・アヒル・ネコ・それに

手押し車を押す狩人、最後におじいさんの

順でニコニコしながら行進して上手に消え

る。小鳥はブカブカドンドンと鳴しながら、

ネコはオモチャの鉄砲を鳴しながら。

(幕)

(禁無断上演)

六月、うつとうしい梅雨の季節、何もかもがはじめとした風感じられる頃々です。

今年の梅雨は「細雪」型だそうです。これはあの音もなく深々と降る粉雪に名ぞられたのではなく、昭和の文豪谷崎潤一郎の名作「細雪」が執筆された昭和十三年の梅雨の時の気象配置が今年のそれとまったく同じために名づけられたとのこと。東日本ははじめとした日々が続く、西日本では集中豪雨が襲う恐れがあるそうで、気もめるところです。早くあのからりとした真夏の太陽をいっばいに浴びたい心持がいたします。

六月、仏教界ではこれといった大きな行事はございませんが、こういう時にこそ、次に来るであろう大きな飛躍の礎をかためる絶好の時ではないでしょうか。どのように小さなことでも根気よく行なえば、大きな力となつてもどつてくるものです。私達の周囲を見ましても、早春、枯木同然の木々が永い眠りか

らさめ、あの弱々しいばかりの新芽をふいたと思つていたものが、今では雄々とした深緑となり、大きく風になびく様はとても気持ちの良いもので、改めて生命力の偉大さを痛感させられます。これと同様に私達も、何の目的もなく日々を過すのではなく、与えられたこの生命を有意義に活動させる、満足ある生活を続けたいものです。

六月、うつとうしい気候のためではないでしょうが、最近の社会は何がちぐはぐな様相を呈しすぎてはいないでしょうか。己れの利益を得んがために何んの罪悪感もなしにふるまう人々がいると思えば、生活のために敢えて危険をおかしてまでもたち向う人々もいるのです。各々の生活環境の違いからくるものであるといつてしまえばそれまでかも知れませんが、同じ空の下に生活する人々全体の問題として、ただ傍観できる問題ではないような気がしてなりません。何か根本的な対策はないものなのでしょうか。

「浄土」講読規定

一部 定価 金六十円

(送料 六円)

会費一カ年 金七二〇円

(送料 不要)

浄土 六月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和四十二年五月二十五日 印刷

昭和四十二年六月一日 発行

定価 六十円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式

会社

発行所 法然上人顕仰会

電話東京二六二局五九四四番

郵便東京八二一八七番

新刊 故林彦明大僧正著

「五重大会勸誠講録」 送料共400円

頒売所 四日市市六呂見 観音寺中

記主 禅師 鑽 仰 会

振替 名古屋 4 0 1 2 番

＜善光寺参拝と信濃の旅のお宿＞

薬 師 会 館 五月一日よりオープン

檀信徒をおつれになつて御来遊下さい

宿泊料（1泊食）A, 2500 B, 2,000 C1,500円

団参の方々には特別御相談に応じます

長野市松代町東条

温泉旅荘 薬 師 会 館

小 布 施 弘 学

新刊 藤 井 実 応 著

「生 き る 歩 み」

頒価200円送料45円

ハガキ通信15年分をまとめたもの

申込先 愛知県宝飯郡小坂井町伊奈新屋

藤 井 実 応

振替 名古屋 2 7 4 6 2 番

最近刊 浄土宗徒待望の好著

佐藤密雄 著

仏教々団の成立と展開

著者のもつとも得意とする仏教々団の規律と統制の問題を分りやすく概説し、現在の仏教々団の在り方に多大の示唆を与える。

林 靈法 著

仏との出会い

現在仏教界における革新的思想の第一人者たる著者が若き日の苦難と思想遍歴を通じて到達し得た浄土教信仰を余すなく描き尽す。

竹中信常 著

日本人と仏教

法然上人と念仏信仰とをひろい視野のもとに、現代日本人の思想構造のうえに位置つけた好著

以上いずれも

教育新潮社刊

定価 六〇〇円

送料 七〇円

● 当方にてお取次ぎいたします

◇ 浄土トラクト ◇

四季の寺まいり (再版)	安居香山 著	価30・〒15
浄土宗のおしえ (四版)	宮林昭彦 著	価30・〒15
諸仏の戒め	村瀬秀雄 著	価5・〒15
一枚起請文をめぐる	村瀬秀雄 著	価120・〒35
選択集私解	竹中信常 著	価120・〒35
ものいう石	竹中信常 著	価150・〒45

多数お申込みには割引いたします。施本にご利用下さい

発行所 法然上人鑽仰会 TEL (262) 5944
振替東京 82187